カナダにおける版画の発展と現況

ガストン・プチ

今年の一月から六月末まで、日本在住のカナダ人版画家ガストン・プチ氏の努力でカナダの現代版画を集めた「十人のカナダ版画家展」が日本各地で開かれた。この版画展は、写真製版によるシルクスクリーン、エッチング、リトグラフ、木版など、カナダ現代版画における多様な作品を紹介したもので、パート＝マルティン・ベイツ、エド・バートラム、ピエール＝レオン・テェトロといった気鋭の版画家が参加した。

カナダでは版画がきわめて盛んで、ほとんどすべての都市にワークショップができているほど。日本との縁も深く、日本の版画展に出展する作家も増えている。以下はこの版画展に自らも出品したガストン・プチ氏による、カナダ版画の紹介である。

カナダにおいて版画は広く行きわたり親しまれている。最高級の用具をもつ多くの美術学校で版画が教えられ、東岸から西岸までワークショップがカナダ地図を賑わしている。事実、現代版画においてワークショップは肝要な役割を果してきたし、今なお果しつつある。

カナダにおける版画の重要さは、あらゆるレベルの版画展が頻繁に開催されていることでも明らかである。カナダ版画・絵画審議会（プリント・アンド・ドローイング・カウンシル）は最近第二回ビエンナーレを主催したし、ケベック州では一九七八年、独自の版画審議会（コンセイユ・ド・ラ・グラヴュール）の設立に踏み切っている。いずれの審議会も、カナダ国境の彼方に活動範囲を拡張しようと計画し、将来は国際ビエンナーレをと案を練っている。版画コンクールは、国、州、地方の各レベルで開かれ、その数は数十を下らない。中でも最も人気があるのは、グラフィックス・ビエンナーレ、バーナビー・ビエンナーレ・プリント・ショー、オープス・ワン等である。

これらに加え、商業ベースの版画ギャラリーも数多くあり、こうしたギャラリーも版画界で重要な位置を占めている。

一方、カナダの版画家は国際ビエンナーレに度々出品し、広く世界に紹介されている。

日本最後の「十人のカナダ版画家展」が七月三日から二十四日まで、東京新宿のフジテレビ・ギャラリーで開かれることになった。午前十時から午後六時までオープン。日曜日は休み。

版画の歴史

さて、挿し絵としての版画は、カナダ建国当時から存在していた。ケベック市の礎を築いたサミュエル・ド・シャンプレーンが画いた絵は、彼の一連の旅行記「ヴワヤージ」を飾る挿し絵版画のインスピレーション源となった。同書は、シャンプレーンの生前、一六〇三年から一六三二年の間にフランスで出版された。事実、ニュー・ワールド（当時カナダはそう呼ばれたが）の絵画をもとに作られた多くの版画が十七世紀前半パリで出版され、パリ社会のエキゾティックな好奇心を満足させたし、当時の百科辞典編集者の貴重な民族学的資料ともなった。これらの版画やその後カナダで作られた版画は、私の知る限りでは単に挿し絵として制作された。

同様に今世紀初め、版画、とくに木版画の用途は広範多岐にわたり、安手の雑誌からバイブルに至るまで、あらゆる挿し絵に使用されていた。多くの人々にとって版画は、せいぜい美術の「貧しい親類」としか考えられず、美術の堕落した姿と酷評するものもあった。しかし、たとえこう言い切ってしまうとしても、この時代に生き、極めて真面目に版画技法を開拓した無名の作家達の存在を忘れてはならない。一九二〇年代にケベックのエコール・デ・ボザールでエッチングが教えられ、一九三〇年代にはリノニウム版画、木版画、シルクスクリーン、モノタイプも教課として加えられた。そして版画制作は紆余曲折の末カナダ芸術界で顕要な位置を占めるようになるのだが、中でも一九三〇年代と、一層確実に地歩を固めた一九六〇年代以降が特筆に価する。

フィリップスとデュムーシェル

英国生れのW・J・フィリップスは、一九一四年はじめてウイニペッグに入植、まずエッチングをシリル・バローに学んだ。しかしこの技法は、水彩画家としての彼の感受性には異質なものであった。間もなく雑誌の記事が縁となって木版画の世界に入るのだが、正式な訓練を受けたこともなく、ただその世界に誘われただけであった。あとはすべて独学。常に水彩画的色調を湛えたフィリップスの版